石川　徹（いしかわ　とおる）
大正２年３月30日　東京市に生まれる
昭和11年３月　東京帝国大学文学部国文学科卒業
昭和61年４月　勲三等旭日中綬章受賞
専　攻　日本の小説風文芸の研究（平安時代を中心に）
現　職　帝京大学教授・愛知教育大学名誉教授
主　著　『うつほ物語秘琴抄』（昭25，川瀬書店），『校注夜半の寝覚』（昭56，武蔵野書院），『新潮日本古典集成大鏡』（平１，新潮社）他

新典社研究叢書46
王朝小説論
平成４年２月28日　初版発行
定価　一五四五〇円
（本体一五〇〇〇円）
著者　石川　徹
発行者　松本輝茂
印刷所　朗生印刷㈱
製本所　牧製本印刷㈱
検印省略・不許複製
発行所　株式会社　新典社
東京都千代田区西神田三―五―六　大坂ビル
TEL東京(三二六五)三七八一・三八六三番
FAX東京(三二三七)七二九二番
振替　東京七―二六九三一番
郵便番号一〇一

©Tōru Isikawa　1992
ISBN 4—7879—4046—5　C 3395

新典社研究叢書46

王朝小説論

石川　徹　著

新典社刊行

自序

本書は、第一論文集『古代小説史稿—源氏物語と其前後』（昭和三十三年五月刊、刀江書院）、第二論文集『平安時代物語文学論』（昭和五十四年四月刊、笠間書院）に続く、私の三番目の論文集である。第一論文集は、本書と同じ二十一篇の論文を収録。第二論文集は、二十四の論文と、「あとがきに代えて」と題し、紫式部とめぐりあいくそたびの憶い出を記した一文とを添えた、計二十五篇から成る。本書で二十一篇を追加、計六十七篇を世に問う事となった。将来、第四、第五の論文集が刊行されたら、平安時代の小説風文芸についての私の研究がほぼ完成するのだが、それまで命が持つかどうか。

本書では、物語や日記に関する概論や、散佚物語の一端を述べたものや、源氏物語を扱ったもののほかに、後期の傑作、浜松・寝覚・狭衣と、これらとは性質の異なる大鏡について書いたものとを載せたが、後者は『新潮日本古典集成大鏡』（平成元年六月刊、新潮社）を執筆した時に発見した一事象を、観点を変えて三たび論じたもので、歴史物語の作り物語風の一面を追究したのである。終末に添えた「研究余滴」は、芥川の「藪の中」についてだが、宇津保物語と今昔物語に関連するので、全くの夾雑物でもないと思う。

また、浜松・大鏡について書いた諸論文の間にまま重複が生じたけれども、これはそれぞれ別箇に書いた論文だからで、やむを得ず元のまま掲載した。それと、第二章の表題は、初めの掲載誌には、題目が単に「女流日記」となっていたのであるが、原稿を依頼された折の課題が、「女流日記の源流」であったから、当初の題名通りに戻したのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なお、第一、第二の論文集には、いずれも「索引」を付して検索に便じたが、今回は身辺に人手が無かったので省略に従った。或いは不便に思われる向きもあるだろうが、事情御賢察の上、お許しを賜わりたい。

終りに、本書の出版を快諾された「新典社」の松本輝茂氏はじめ同社の方々の御尽力に感謝の意を表する。

平成四年新春

著者しるす

目次

自序 3

第一章　物語の流れ……九

第二章　女流日記の源流……二二

一　女流日記の作品 22　二　女流日記の分類 24
三　様式の確立 26　四　蜻蛉日記の母胎 28
五　歌日記・歌物語・世の物語・物語風歌集 30
六　女流日記の源流としての『伊勢日記』 31

第三章　『しらら（白良）』物語考……三五

第四章　桐壺巻の内容と源氏物語の主題……四二

一　桐壺巻と正編の主題 43　二　いと斯く思う給へましかば 44
三　生死別、そして祖母とみどり児 56　四　相人の予言 57
五　藤壺登場と葵の上との結婚 58　六　斯かる所に思ふやうならむ人を 59
七　出離の志 59　八　全編を蔽う主題 60

第五章　葵の上の生涯……六三

一　時の権勢家のひとり娘 63　二　羞かしさに逃げ隠れる妻 64
三　経済的・社会的な拠り所としての左大臣家 66
四　「絶え絶え」の左大臣邸訪問 67　五　源氏の機嫌を取り結ぶ舅左大臣 69
六　中納言・中務の役割 70　七　「問はぬはつらきものにやあらむ」 72
八　「あだ心兼ぬとや君が」 73　九　一点の非の打ち所もない葵の上 75
十　「柔らかに寝る夜はなくて」 76
十一　葵祭り・車争い・生霊、そして死とその追憶 78

第六章　「須磨・明石」の諸問題……八〇
一　須磨源氏とは　80　二　桐壺・若紫と須磨・明石　84
三　葵・榊と須磨・明石　86　四　無実を叫ぶ源氏と有罪におののく源氏　91
五　なぜ須磨が選ばれたか　96　六　「生ける世に」――須磨巻に引く万葉の歌――　101
七　「いとしもと」――拾遺抄か拾遺集か――　108
八　源氏第一の詞――月入れたる真木の戸口、けしきばかり押しあけたり――　110
第七章　源氏物語の自然美……一一五
――春と秋と――
第八章　源氏物語の自然美……一四八
――秋と冬と――
第九章　更級日記の主題と構想……二〇九
――孝標女の物語創作の必然性――
第十章　『みづからくゆる』物語考……二一五
一　男主人公をめぐる四人の女性　218　二　「くゆる」の意味　224
三　「燻ゆる」と「悔ゆる」との関係　227　四　補遺――「大内山」のこと　230
第十一章　浜松中納言物語精考……二三一
一　三人の大臣　233　二　おほい殿と大上（おほうへ）の子女たち　241
三　大将は太政大臣の猶子か　245　四　父宮転生の噂の出所　247
五　夢告も予言も必ずあたる　251
第十二章　浜松中納言物語の登場人物とこの物語の主題……二五四
一　登場人物概観　254　二　大弐女を重要人物に加えた理由　256
三　吉野の尼君のモデルとその終焉の意味　259　四　「妙荘厳の契り」と「善知識」大将の姫君　265

五　吉野姫と聖の「死」の予言　269　六　河陽県の后と大将の尼姫君との対決　273
付　新研究による「改正系図」　276

第十三章　浜松中納言物語の虚構の方法とその創造……二七九
一　母に会いたさに日本へ来た混血中国人　279　二　中納言一行の中国到着後の道順の正確度　282
三　河陽県の后の侍女たちが口にする日本語　284　四　中国訪問の往路・帰路の時季　287
五　河陽県の后所生の若君の描写の非現実性　288　六　平安末期における転生の現実性　291
七　転生と夢告と　292　八　聖の語る死の予言　295

第十四章　夜半の寝覚は孝標女の作と思う……二九八
一　否定的風潮に対する疑問　298
二　ヒロインは中の君　300　三　いたわり合う父娘　302
四　母親の処理　304　五　広沢が西山に変る　305
六　二人の兄　307　七　乳母のことども　310
八　対の君と上総大輔　311　九　姉と姉婿　314
十　若関白と源資通　317　十一　老関白と橘俊通　318
十二　道真の歌二首の引用　319　十三　蜻蛉日記の引用　320
十四　姨捨山の故事の引用四回　321　十五「寝覚」という語　323
十六「羽ぶく」という語　324　十七「飽（厭）き果つ」という語　324
十八　后の位も何にかはせむ　327　十九　立ち聞きかいまむ人のけはひ　327
二十「変らざりけり」という発想と表現　329　二十一　その他の共通事項　331
二十二　輪廻転生思想　331
付『夜半の寝覚』の梗概　333
第一部　334　第二部（中間欠脱部）　338　第三部　342　第四部（終末欠脱部）　345

第十五章　寝覚物語に及ぼした宇津保物語の影響……三五〇
一　源氏の太政大臣の存在　351　二　天人降下事件　354

三　真砂君（まさごぎみ）という呼称　356
四　朱雀院后宮の謀略と失敗　357　五　真砂君勘当事件　358

第十六章　『夜半の寝覚』出典考……三六三

第十七章　源氏物語と異なる浜松・寝覚・狭衣の魅力……四二二

第十八章　百九十歳の老翁に語らせる大鏡の警抜な構想とその抱負…四四〇
一　能信周辺の人を擬する最新の作者論　440　二　大鏡の原型と成長　443
三　雲林院で語る世次の年齢　444　四　大宅世次はボケ老人か　447
五　世次の姉女房の年齢　449　六　六国史を嗣ごうとする抱負　451

第十九章　大鏡序の二つの嘘と一つのまこと……四五四
——万寿二年は過ぎ去った昔——
一　虚構の物語としての大鏡の性格　454　二　世次の年齢（一つのまこと）　456
三　歴史的現在（第一の嘘）　459　四　道長存命を装う（第二の嘘）　460
五　大鏡の原型の成立　463　六　大鏡著述の企画発案者、藤原能信とその協力者たち——作者　464
七　筆禍を畏れる——社会的制約　468

第二十章　大鏡の虚構と史実……四六九
一　雲林院の菩提講の年次は康平八年五月　469
二　夏山重木の年齢　473　三　世次の妻の年齢と兼輔・衆樹の恋文　475
四　世次の年齢の確認——山岸徳平氏の疑問——　480
五　今鏡に見える世次の最晩年　483　六　総括　484

第二十一章　映画『羅生門』並びに芥川の『藪の中』に登場する盗賊の呼称をめぐって（研究余滴）……四九〇

あとがき　494

第一章　物語の流れ

一

「物語」という名称は、日本独特のもので、外国の呼称で、これにぴったりあてはまるものはあるまい。元来は、口承文芸であって、文字文芸ではなかった。「霊（もの）」が語る事件・行為であって、「神」が語る神宣・託宣ではなく、人々は、「物語」を大切な拠るべきお告げとして謹んで聴く必要はなく、それを聞いて面白ければよかったのであり、感動できれば十分であっただろう。「霊（もの）」自体は語ることができないから、その代弁者である人物が、「霊（もの）」の代役を勤めて語るのを聞いたわけである。

その内容は、おそらく、感動を喚びおこす平凡でない人物の事蹟などであったろうから、偉大であったり、奇怪であったり、ともかく異常な事件・行為が語られたのであって、このような語りを喜ぶ人々が、共感をもって耳を傾けたに違いない。この事から必然的に、次のような事が「物語」の属性として出てくる。まず第一に、「物語」は過去の話だということである。たとい、その事件がおこったり、その行為が行われたりした直後であったにしても、それはもはや過去の出来事であるはずである。まして、感激的な面白い「物語」が次々と語り伝えられて行くうちに、ますますその「物語」は、過去の事象となるから、大抵の「物語」は、古い話になる。後世、文字文芸としての「物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文学」となってからも、この性質はうけつがれ、「物語」は今日の時代小説と見るべきものとなった。また、その異常さ、偉大さ、変怪さ、美しさ、醜さ、恐ろしさ等を、話し手が強調するのは陥りやすい傾向であるから、話に尾ひれがつき、誇張が生じた。また、主題を弱める事実は、隠蔽され歪曲されて、言いたい点だけが前面に押し出され、都合のわるい点は抹消されるから、虚構が生じたに違いない。これには他律的制約と自律的制約とがあるけれども、いずれにしても、事実は少なくなり、嘘が幅を利かすようになる。こうして、「物語」は、事実から遠ざかり、「物語文学」もまた虚構の文学となった。

「物語文学」の隆盛時の傑作、源氏物語もまた、内容年代を延喜・天暦のころにとって語り始めているのであって、時代小説であった。虚構作であることもまた周知の通りである。「物語文学」の書き出しが、多く「今は昔」であるのは、そのためであって、「いづれのおほむ時にか」としたのは、常套句を嫌って、言い変えたまでのことである。そして無名草子の「狭衣物語」の評言中に、「物語といふものいづれもまことしからずといふなかに」とあるように、嘘をつくのが物語の常道であった。

二

このような口誦的流動的な「物語」が「物語文学」となって結実するためには、表音的な文字の出現が必要だった。古事記の用字法はその意味で重要だったけれど、結局、太安麻呂の苦心もあれだけで、その後はまっとうな漢文で書こうとする努力に力が注がれ、発音通りに伝えることができなかったから、日本霊異記の時代（平安初世）となっても、変体漢文の域にとどまっていた。和歌だけはどうやら万葉仮名で書き現すようになったけれども、散文を自由自在に書くまでには至らなかった。

その意味で仮名の発明と発達とが、「物語文学」発生のための決定的な発条となった。誰がそのための功労者であったかは、ここではあえて論じないが、まだもとの漢字の字形を残している草仮名でなく、崩し切った簡易な平仮名（女手）が作られたという事は、幾ら高く評価してもしきれないであろう。

平仮名の発達は、まず女性間に文通の便宜をもたらした。さらに、息子から母へ、母から息子へ、また父親から娘へ、娘から父親に、夫から妻に、妻から夫に対し、そして恋人同士が離れている所からも意志を通じ合えるようになった。伊勢物語の業平とその母との「さらぬ別れ」についての歌の贈答も、万葉仮名でなく平仮名ではなかったか。また業平がその家に来ていた娘に教えて藤原敏行と取り交わしたラブレターも、同様平仮名であったろうと私は推測している。

女子消息の発達は、「物語」の口誦による享受を、仮名文つまり「物語文学」の形に変えて、宮廷婦女子に与えることとなったらしい。後宮において、その筆写された「物語文」を、ナレーターを勤める女房が朗読するのを、皇后や女御や姫君たちや、他の女房連も加わって聴いて楽しむという享受の形式を流行定着させたと思われる。さらに、これに絵が描かれ、その絵巻の方を、朗読に耳を傾けながら、皇后・女御もしくは姫君が見ているということになれば、享受の形としては万全に近い。このような享受のしかたが、最初に実現されたのは、源氏物語絵合巻によれば**竹取物語**であったのだろう。今日盛行している漫画・劇画は、だから、最も日本的な文芸享受の様式であったという事ができる。江戸期の、草双紙・合巻のたぐいも同類である。竹取物語のほかに、唐守・藐姑射の刀自・伊勢物語・住吉物語・正三位・狛野・芹川・朱の盤・宇津保・落窪・源氏・狭衣・寝覚等の物語はすべて絵画が伴なっていたことが諸書に見え、当時の絵巻の現存しているものさえある。倭絵の始祖とされている巨勢金岡は、清和天皇以後五代の天皇に仕えたが、この人及びその徒によって描かれた物語絵が、新作物語の完成に伴なって製作されたに違いない。

だから、「物語文学」はただ珍しい事件を語ればよいのではなく、絵になる場面を、所々に挿入する必要があった。美しい自然の景色の中での美男美女相対する光景などが、「物語文学」の中に、しばしば出てくるのは、こうした絵を入れるための配慮だったに相違ない。

また、そういうさわりの場面には、美しい和歌が挿入され、朗読者はこれを朗詠して、いやが上にも、物語効果を高めるようにつとめたに違いない。これが最盛期の物語文学享受の実態であったろう。因みに、日記文学は、このような絵を加える必要がなかったから、特例を除いて（紫式部日記など）、絵巻にはならずに終ったようである。

三

ところで、上述のように、本来の「物語」＝「物語文学」は、時代物であり虚構物であったから、後来の**事実物語**や**歌物語**とは、別の物であった。それが証拠に、三宝絵詞の序（九八四）に示されている物語名も、枕草子の「物語は」の段に掲げてある作品も、すべて「作り物語」である。今の言葉で言えば、小説であり、フィクションであった。枕草子や源氏物語以前の「物語」は、大部分がこうした作り物語であったのが、**伊勢物語**や**大和物語**が出てからは、**平中物語**や**豊蔭**や**多武峰少将物語**のような歌物語乃至は事実物語を生むようになったけれども、これらは歌集とも歌日記とも物語風歌集とも考えられる作品であって、作り物語とは一線を画していた。**篁物語**も、事実物語ないしは伝説物語であってこの系列に立つ作品であるし、**伊勢集**も「伊勢日記」とも呼ばれ、物語的家集であるが、作り物語ではない。この系列に属する作品に、元良親王集・本院侍従集・斎宮女御集・清慎公集・仲文集・元真集・信明集・中務集・小大君集・檜垣嫗集・海人手古良集・いほぬし等がある。**大和物語**も伊勢物語とは違って、複数の実在歌人の名歌を詠んだ時の事情などを記して、和歌説話集の態をなしており、その歌人が単数の場合が、平中物語であるのと同

一の形だから、平中物語をたくさん集めた形の物語であって、作り物語ではないから、清少納言も「物語は」の段に挙げていないし、紫式部も全く言及していない。ただ大和は、巻末近くで、詠み手の明らかでない伝説歌に言い及んでいる点が前半とは違っているが、それも、和歌にちなむ伝説説話であって、新しく創作された虚構物語ではない。むずかしいのは**伊勢物語**であって、清少納言は「物語は」の段に挙げていないから、やはり作り物語とは見ていなかったと考えられる。しかし、紫式部は、絵合巻で竹取・宇津保・正三位という三つの作り物語と同列に扱っている。つまり彼女は伊勢物語を、業平中心だが、嘘が入っている虚構作と見て、竹取・宇津保・正三位と同じように作り物語と見做していたことになる。このように、同じように「歌物語」という仲間に入るけれども、伊勢物語は虚構作、大和物語は、事実もしくは伝説説話を記録したものという点で、別扱いにしなくてはならない。

また、蜻蛉日記は日記文学であるけれども、物語文学を強く意識して、これに反撥し、「事実」の記録であろうとしたのだが、明治以降の我が国の「小説」が必ずしも虚構を第一としなくなった点から言えば、彼女の姪の菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）の書いた更級日記とともに、今日では、自叙伝体小説として、物語と必ずしも別のものとしなくてもよいものになっている。さらに、和泉式部日記となると、作者が、自分の目の届かない所にいる人間の行動を全知的視点で書いているので、作者の謙遜卑下（けんそんひげ）の言葉が見えているにも拘（かかわ）らず、自分を第三者であるひとりの「女」として見ているから、これまた小説的である。だから、寛元本・応永本の表題がすべて「和泉式部物語」であるのもうなずけるのであって、この作になると、もはや、「物語」に属するか「日記」に属するか、簡単にはきめられなくなり、平中物語が別名を「貞文日記」「平中日記」というらしいのや、多武峰少将物語が「高光日記」とも言われ、篁物語が「篁日記」とも呼ばれるのと同じように、日記と物語との間に揺れ動いている作品という事になる。ただこの種の作品は、事実物語とか伝説物語とか称して、作り物語とは一線を画して考えるほかはない。今日的名称である小説という言葉

を使うと混乱してくる。

四

さて、作り物語に戻ると、散逸物語を除けば、平安時代の作品で、現存しているものは少なく、**竹取物語**のほかに上述の**伊勢物語**を加えても、**宇津保物語**・**落窪物語**の四篇が、**源氏物語**以前の古い作品である。住吉物語は、原作が滅んでいて、原作の和歌や、些少の詞章を、現存本の中にまじえ残しているらしいが、その判別は容易でなく、現存本に至っては、鎌倉後期までは溯れても、室町時代の本が多く、鎌倉中期の風葉集（文永八年成）に採択された本に戻れるかどうかというのが、やっとの所である。源氏物語以降はどうかというと、院政に入る直前のところに、**浜松中納言物語**・**狭衣**・**寝覚**の三編がある（寝覚は院政以後説もあるが、やはり直前であろうと私は思っている）。院政期に入って、**今とりかへばや**が、その中ごろ作られ、**在明の別**が、末期に作られたらしい。どちらも無名草子（一二〇〇～一二〇一）にその評が見えるが、今とりかへばやが少し古く、在明の別は、無名草子の著作時に近いころに出現した作品といった書き方がしてあるし、近ごろの諸家の説を参考しても、そう見てよいと思う。要するに院政期の長編物語は、この二作品である。

なお、ほかに**堤中納言物語**という十編から成る短編物語集があって、その編集は、鎌倉時代になってからと考えられるが、十編は、大よそ平安朝の作らしい。もっとも十編の中の数編は鎌倉初期の成立かもしれないが、これらも院政期には成っていたとしてもよさそうである。また院政期に、「巣守」、鎌倉後期か南北朝期に「山路の露」が作られたが、これは源氏物語を増補した体裁の本だから、別に考えるべきであろう。

平安時代と鎌倉時代との境目をどこにするかはむずかしいけれど、物語文学研究の上では、便宜上、物語評論書の

性格を具えている無名草子にその名の見える作品は、十二世紀の終りまでに成立していて無名草子の作者が入手読了しているのだから、ほぼ平安時代と見てよかろう。鎌倉最初期の成立ということもあり得るが、一応、上記の平安朝物語の方へつけて取り扱っている。とすると、**松浦宮物語**がこれに加わる。要するに、物語文学の発生期（清和天皇の貞観末）から、無名草子成立までに現れた作り物語の作品数は、長編・中篇が十一編、短編十編、しめて二十一編ということになる。

五

平安最末期に出た今鏡という歴史物語の中に、「作り物語の行方」という章があるが、これは、枕草子の時代なら、「物語の行方」という風に「作り」を除いてもよかったのだが、あえて「作り物語」と書かなくてはならなかったわけは、今鏡のころになると、上記、事実物語・和歌説話物語のほかに、「歴史物語」と呼ばれる一群と、「説話物語」と呼ばれる一群との、二系列の作品が出て来たので、これらと本来の物語である「作り物語」とを区別して呼ばないと混乱するおそれが出てきたためであろう。

歴史物語も説話物語も、物語には違いないが、枕草子や源氏物語のころには、まだ見かけなかった種類の作品で、源氏物語以後になって出現したものである。歴史物語は、源氏物語の影響の下に**栄花物語**が出たのが始まりで、それまでは、いわゆる漢文体の国史として六国史が作られていたのであるが、栄花物語が出てからは、六国史のあとは廃絶して、仮名の史書が陸続として出てくるのである。いわゆる**大鏡・今鏡・水鏡・増鏡**の四鏡である。今は伝わらないが、今鏡の記事をついで、高倉・安徳・後鳥羽の御代を書いたものに、**弥世継**という書物があったことが、増鏡の序によって知られている。作者は「うき波」（散逸物語）という作り物語を作った（無名草子）藤原隆信である。増鏡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com